



大学における学問のすすめ

国立大学法人三重大学
学長 駒田 美弘

大学では、人材育成(教育)と研究活動が一体不可分なものとして実施されています。そして、企業と同様に、その活動のための組織(学部・大学院)を整備し、ガバナンスを効かせつつ、適切な資源(人員と予算)配分が行われることによって、その機能が発揮されます。取り組むべき課題は、将来に向けての持続可能な開発目標(SDGs)、Society5.0と第4次産業革命、人生100年時代、グローバリゼーション、地域創生など、極めて多様です。大学は、世界が抱える課題に対して教育と研究の活動を通じて真摯に向き合い、その成果を発信・還元することにより、社会からの評価と支援を得るという好循環を形成し、知と人材の集積拠点としての機能を発展させています。

大学で育成される人材は、様々な分野で活躍できる一流のプロフェッショナルです。すなわち、自分自身の利益、昇進よりも、ステークホルダーの利益を第一とする「ステークホルダー ファースト」、結果が重要であり、時間をかけて頑張っても、いくら努力しても、成果が十分でなければ、評価は低くなる「アウトプット オリエンテッド」、仕事の成果の質の高さが重要であり、手間とコストは二の次で本気で世界最高を目指す「クオリティ コンシャス」、助けは求めるかもしれないが、他人に頼るのではなく、自分自身で決めて、実行し、仕事の結果責任は自身で負う「センス オブ オーナーシップ」の4つを習得したプロフェッショナルを社会に輩出しています。また、研究機関でもある大学は、多様で独創性豊かな、優れた研究成果を創出することも重要な仕事ですし、それができて初めて企業、地方自治体等との共同研究や連携プロジェクトの実施も可能となります。そして、地域の特色、あるいはこれまでの研究業績等を踏まえ、世界から注目される成果を発信し、研究の拠点化を推進しています。

学問は、「人がよく生きていく」ために、生涯にわたって必要とされます。公的立場にとらわれず、自由で主体的な活動を心がけ、縦割りではなく、横のつながりを深めて行くことが大切です。学習活動の在り方としては、他から与えられるものではなく、自分で努力して身につけていくべきです。未来社会を担う人たちには、それぞれの最先端の専門分野での学習に加えて、自分自身の狭い縄張りに固執しない脱管理、自由度の増した場での学習を心がけていただくことを期待したいと思います。凄まじい変化の波が押し寄せている困難な時代にこそ、大学は「学問の場・考察の場」を提供することが求められていると感じます。